Japan Geoscience Union Meeting 2010
(May 23-28 2010 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2009. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

HQR010-07 会場:展示ホール7別室1 時間: 5月27日13:45-14:00

後期旧石器時代前半期における石器素材利用形態の変遷過程

Transitions of lithic raw material utilization during Early Upper Paleolithic

山岡 拓也[1*]

Takuya Yamaoka[1*]

[1]首都大学東京　都市教養学部

[1]Archaeology, Tokyo Metropolitan Univ.

本研究では、武蔵野台地の石器資料の検討に基づき、後期旧石器時代前半期における石器素材利用形態の変遷過程を明らかにするとともに、石器素材利用形態の変化を自然環境の変化に応じた旧石器時代の狩猟採集民の行動変化と結びつけて説明する。
南関東の武蔵野台地では、他の地域に先駆けて、1970年代から旧石器時代の遺跡や遺物の調査・研究が、本格的に開始された。1990年代までには、技術形態学に基づく定性的な石器資料の比較検討が積み重ねられ、編年研究が進展した。発掘調査された遺跡数が多く、旧石器時代遺物の包含層が比較的厚いために、後期旧石器時代前半期の研究において、武蔵野台地は石器群編年の標識的な地域として扱われてきた。
本研究では、こうした武蔵野台地の後期旧石器時代前半期（およそ40000yBP～28000yBP）の32遺跡で検出された72の石器集中（あるいは石器集中のまとまり）を構成する石器資料を対象にして、石器素材の選択・剥片剥離技術・定形石器製作に関する定量的な比較を行い、石器素材利用形態の変遷過程を検討した。検討の結果として、後期旧石器時代前半期における3時期の石器素材利用形態の変遷過程を示した。石器素材利用形態の変遷過程は、武蔵野台地に比較的近い場所で採取された岩石を石器素材とした不定形石器や斧形石器の利用が顕著なⅠ期から、武蔵野台地から遠く離れた遠隔地で採取された岩石を石器素材として小形で規格的な石器を製作し利用するⅢ期へと、中間的な様相を示すⅡ期を経て、その性質が大きく転換する過程として説明される。
こうした石器素材利用形態の変化は、自然環境の変化に応じた狩猟採集民の適応戦略の変化と結びつけて説明することができる。後期旧石器時代前半期は最終氷期最寒冷期へ向けた気候変化が生じた期間にあたり、その期間中に酸素同位体ステージ3から2へ移行するとともに、気候変化に応じて植物相も変化していたと考えられている。そうした環境の変化に応じた適応戦略の変化として、遊動領域や移動性の変化が予想されるとともに、道具素材として利用された資源構成も変化し組織化された技術全体が大きく改変されていたことが予想される。

キーワード:後期旧石器時代前半期,石器素材利用形態,武蔵野台地

Keywords: Early Upper Paleolithic, lithic raw material utilization, Musashino Upland